
相棒短篇小説集

結坂アヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相棒短篇小説集

【Z-コード】

Z4097S

【作者名】

結坂アヤ

【あらすじ】

相棒の短篇を集めた小説です。

馴文ですが、良かつたら見て行って下さい。

相棒短篇小説（前書き）

連載で打っていますが、短篇小説です。

初めて作った小説ですが、見て行って下さい。

（亀山薫が犯人達のいる倉庫に、着いた時）

薫「（またやっかい事になつてんな。つてかそれって俺の性格？）」

たまたま薫は不審な奴らを目撃し、その中に数名手配犯がいたから、この倉庫まで追つたのだ。だから独断。

薫「（こいつかじりじりするか？右京さん）連絡した方が良いのかな？」

「と思ふに携帯を取り出そうとしたところ……。

ガシャン！――！

薫「（やばつ――？）」

ふいに何かが当たつて、倒してしまつたのだ。

「やじここののは誰だ――？」

指名手配犯に気づかれてしまい、困惑する薫。

薫「（逃げる…）」

そう思い、薫は走り出す。ばれる前に。

「追え…！」

指名手配犯の声と、一斉に走り出すものの仲間達。

その頃の右京は…。

角「よつ？暇か？」

右「じつも」

角「あれ？まだ来ていないの？」

角田の視線の先には、薫がいつも使つてる机。

右「ええ」

角「……そういうや、前もこんな事あつたよな。確か……」

右「拉致でしたね」

角「……ただの遅刻か、はたまた事件に巻き込まれてるか」

右「……ただの遅刻だと良いのですが……」

その時右京の携帯が鳴つた。

右「失礼」

角田に一言断り、ディスプレーを見ると。

“着信 亀山薰”

右「はい。杉下です」

薰『俺…です』

携帯から聞こえて来たのは、荒い息遣いと少し絞り出すような声だった。

すぐさま右京は、薰の身に何かあつた事を知る。

右「……亀山君。今どこにいますか?」

薰『……今は、』

右「何か騒がしいようですが、今外にいますか?」

薰『外……じゃ……ない……です』

右「(外じゃない?とする)」

薰『……すこま……せん』

右「はい?」

薰『……これ……以上は……長く……話せ……ません』

右「亀、山君?」

薰『……美和子に……伝えて……下……さい。悪……かつた……つて』

そこで電話は途切れた。

右「亀山君?……亀山君?……」

角「おい。亀山がどうしたんだよ?」

その疑問に答えず右京は、切れた携帯をじばし見つめ角田に向づ。

右「ちょっと、出かけてきますーー。」

すぐに特命係を出て行つた。

そんな右京を、角田は呆然としながら。

角「何があつたんだよ? 一体」

そんな言葉が虚空に消えながら、右京が向かつた先は鑑識課の米沢の元だつた。

右「至急、」の携帯の電波の場所を調べて下さーー。」

米「はいーーわかりましたーー。」

電波を調べているその間、右京は考えていた。

右「（騒がしこと）い。外じゃないとするなら……中しかないでしょうね。だとするなら、亀山君のいる場所は……。それにしてもあの声。もしかしたら彼は……。だとしたら、早く見つけ出さなければ」

米「杉下警部……」

右「特定できましたか！？」

米「はい。場所は……今は古い倉庫になつていて。真中電気です」

右「倉庫ですか。（だとするならば、つじつまが合います）ありがとうございます」

すぐさま右京は飛び出した。

警視庁玄関に向かおうとしてる時に、右京は捜査一課の伊丹達とすれ違った。

伊「おや。誰かと思えば特命係の警部殿ではありますか」

いつも通りに伊丹は、皮肉を吐いたが右京はスルーした。

芹「……スルーされましたね」

伊「うむほんとだよ

生意気な後輩の頭を、伊丹は叩いた。

芹「いたつ！――」

伊「追づかれて――何か事件をかぎつけたのかもしれん――」

三「まあ、そうかもな

芹「あれ？」

三「どうかしたか？」

伊「何だよ？」

何か気づいた芹沢に伊丹と三浦は聞いた。

芹「そりゃ、亀山先輩いませんでしたよね

三「……置いてかれたとか？」

芹「いやそんな事ないと思いますよ。いつも杉下警部と一緒にましたから

伊「そういうや、今日亀の奴見てねえな」

いつもの憎い相手を、伊丹は思い出していた。

芹「まさか、事件に巻き込まれたとか？」

三「それで警部殿が追つてゐる」

伊一なる感じな。それだつたらつじつまが命うな、

芹 た た ひ
早 く 行 か な い と お す い て す よ ！ ！

三
ま
も
見
た
な
て
な
に

卷之三

伊「あいつならなんか知ってるだろ。行くぞ！」「

三、&前「おお(せこ)」

そんな事を検査一課が話している時。薰は…。

薰「…………っ、」

倉庫のある部屋で身を潜めていた。

右肩や、脇腹、左足に、銃弾を受け、急所は外したが、血が出て今やばい状態だった。

薰「（とつあえず、応急処置はしたがやばいかな）」

動けない状態である。

薰「（右京さんに電話はしたものの、場所言わなかつたしな）」

「おこ……出て来い……」

薰「（出て来ていつて言われて出てくれる奴がいるか……）」

びつじょつか迷つていると、扉が開いて仲間の1グループが入つて來た。

「（）にいたんか～」

「一緒に下までつこしてきてもらひつけ」

仲間の一人が、薫の襟を掴み無理やり立たせた。

「まあ、逃げようなんて、思わん方がええで。……だが、どっちにしろ、逃げようがないやろ。その足じやな……」

銃弾を受けた傷を、足で蹴られる。

薫「……うあつ？！」

蹴られた薫は、痛みで地面に崩れそうになつた。

「ちゃんと立てよー！」

薫の襟を掴んでいた一人が、また無理矢理立たせる。

そして下に連れて行かれ、指名手配の前に出される。

「…………」

突き出されよろめいて転んだ薫を指名手配犯…白井夜光は見た。

薰も白井の方を見た。

「夜光さん。ここにビームしましょうか?」

「しかも、ここに警察だぜ」

周りにどよめかせ、笑いが巻き起こる。

白井は即座に判断する。

転がってる薰に、蹴りを加えた。

薰「……うあつ、」

小さく薰は、悲鳴を上げた。

構わず蹴る、

仰向けにされ、傷口を重複的にやられ。

「薰」「……つ、」

やられ続け、肩に足が置かれる。強く。

薰「うあつ？…」

薰の体に痛みが走る。

それから、脇腹を踏まれる。

薰「つ？？…」

意識が飛びそうな薰に、激痛が走る。

そんな姿に夜光は、足をどけ手袋をはめ、薰の腰から拳銃を抜きそれを使わず首を絞めた。

夜「じゃあな。バカな刑事さん」

薰「ぐつ…あつ、」

首を絞められ薰の意識が落ちた時、夜光は薰から離れ、奪った銃の照準を薰に合わせ引き金を引こうとした時。

ガラ――――――

扉を開く音が聞こえた。

夜光達は、一斉に扉の方を見た。

右「やはりあなたでしたね。……白井夜光さん」

夜「何だよ？あんた」

薰に拳銃を向けたまま、夜光は言葉を放つ。

右「曲がりなりにも、そこにいる彼は僕の部下です」

夜「こいつが？」

氣を失つてゐる薰を見ながら言つ。

右「ええ」

右京も薰を一瞥してから話す。

右「白井夜光さん。あなたは、前に起こした殺人事件で指名手配されてますね。それを偶然彼があなたを見つけた。そしてこここの倉庫まで追いかけてきた」

夜「ふうん。そつなんだ。だとしたら、本当馬鹿だな」

突然拳銃を右京に向ける夜光。

しかし右京は、動搖をする様子を見せない。

右「…………」

夜「へえ。あんた動搖しないんだな」

右「しませんよ」

夜「じゃあ、これは?！」

すばやく拳銃を薫に照準を合わせ、引き金を引こうとする。

右「伊丹刑事……」

それを合図にするかのよつに、伊丹を前に一斉に捜査一課が入つて來た。

呆気に取られた夜光は、なす術もなく逮捕された。

右「亀山君！…しつかりして下さ……亀山君……」

薰「つ…ゴホッ！…ゴホッ！…」

いきなり空気が入つて來たので、薰はむせてしまつた。

右「ゆつくり深呼吸をして下さ…」

言われた通り薰は、ゆつくり深呼吸をした。

「どうやら落ち着いたみたいだ。」

伊「何で俺達が、来るのわかつてました？」

右「ああ、何ででしょ」つ、「…」

そつ言いながら右京は、ネクタイでとハンカチで薰の傷口を塞いだ。

薰「すい…ませ…ん」

右「喋らないで下さ…」

芹「救急車を呼びました！！」

それから救急車で運ばれた薫は、処置室に運ばれた。

付き添いで救急車に乗った右京は、美和子に電話をした。すぐに来てくれた。

美「薫ちゃんの状態は！！」

右「大丈夫です（亀山君に言われた事はあります、忘れましょう）

薫の電話の最後に言われた言葉を、右京はなかつた事にした。

それから薫は、病室に移され入院を何日かしなければならなかつた。

美「まつたくもつ。心配したんだからね！何で、一人で突つ込むかな？」

薫「だから、謝つてるだろ」

右「亀山君」

薫「はい？」

右「なぜ行動する時、電話をしなかったんですか？」

薰「……倉庫に入った時に、電話しようとは思つたんですが、その前に何かを倒してしまい、できなかつたんです」

右「なるほど。…それで撃たれたと言つわけですか？」

薰「…はい」

美「バーカ」

薰「うつ」

右「それにしても、よく電話できましたね。その傷で

薰「ええ。少し辛かつたですが……」

ちよつと薰は、困つた顔をした。

美「自業自得よ」

（終わり）

相棒短篇小説（後書き）

数日経つて、薫は退院した。

お知らせ

大変残念なお知らせがあります。（残念と言つより、全然JPしてないけど）

実は著者こと結坂アヤは、携帯を一つ持っていました。

一つは前使っていた携帯で、小説用で持っていました。もう一つは今使っているメールや電話用で持っていました（この携帯で、小説を作ると何故か携帯が壊れちゃうんです。だからあまり、作らないようにしてるんです）

その小説用に使っていた携帯が、紛失してしまったのです。だから……まあ、全然小説をJPしてませんが、この相棒短篇小説集がJP出来なくなりました。（まあJPしようかどうしようか、思つたんですけどね）

だからこの相棒短篇小説集はこれで終了します。本当にすいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4097s/>

相棒短篇小説集

2011年12月16日19時53分発行